建物内部には，計４カ所に暖炉があるが，その４カ所とも異なる形をしている．玄関を入って，最初の広間（写真102）に２カ所（写真103・104），広間の東に位置する会議室（写真105）に１カ所（写真106），２階の部屋（写真107）に１カ所（写真108）である．また扉や窓，電灯，壁紙，天井，残っている調度品などにも，その時代をみることができる．

この「日暮し」という地名は，四阪島製錬所設計にあたった塩野門之助に由来する．門之助は大胆かつ細心で，島内の立地，両島連結地点選定の際にも，小高き丘に腰をおろし，日々天候に影響される風向きを見て黙々と将来の計画をめぐらしていた．それが数十日にも及んだため，いつしかその丘が「日暮し」と呼ばれるようになった．[122]

大正初期には，別邸に大島桜が植えられている．この桜は，ガスにも強く育ちやすい伊豆大島の桜である．この時，測候所や倶楽部，学校にも同じ桜が植えられた記録がある．[123]

この別邸は，現在も５年に１回ペンキを塗り替える等のメンテナンスをしているが，壁に木の皮を使っていたりするので，メンテナンス費用がかなりかかっている[124]．この日暮別邸の西側にある日本風建物は，昭和12年７月に増築されている（写真109）．現在，地下の部屋は新入社員研修の宿泊に使用している[125]．

写真100　日暮別邸

写真101　日暮別邸（明治39年頃）　別子銅山記念館提供

写真102　広間（日暮別邸）

写真103　暖炉１

写真104　暖炉２

写真105　会議室（日暮別邸）

写真108　暖炉４

写真106　暖炉３

写真109　日本風建物（日暮別邸）

写真107　２階（日暮別邸）

消防署四阪分団・保健室

図30－11地点に，消防分団が残っている（写真110）．昭和中期，10人から20人の分団員がおり，火災予防運動や各部落のポンプの整備，ホースの点検等を行っていた．四阪島では，あまり火災は起こらなかった．小さい火災があった場合も，美濃島には何カ所にも消火栓・ホースが設置されていたので，ホースをつないで栓を開けるだけで，女の人でも消火できるようにしていた（写真111）．また，四阪分団の横には保健室あった．そこには，社員である保健婦が常駐し，従業員の身体測定等を行い，健康管理をしていた．[126)]

消防署のあるこの美濃島以外の島で火災が起こると，大騒ぎであった．農家が暮らしていた明神島では，昭和９年に島の一番高い場所で火災が起こり，美濃島の消防隊が出勤したことがある．海水をポンプで中継タンクへ上げ，更にタンクから現場まで水を上げるなど，大騒動であった．[127)]

写真110　消防分団と保健室

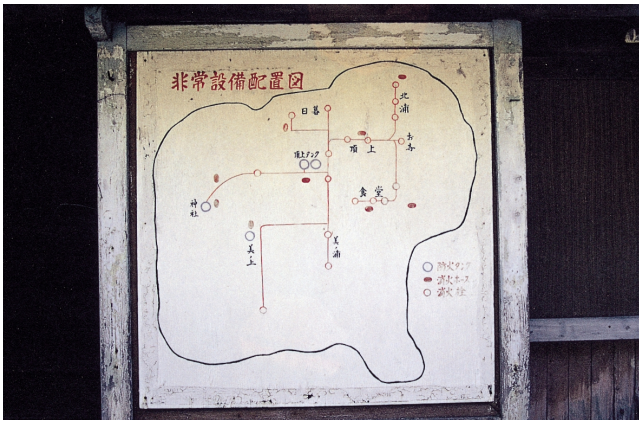

写真111　非常設備配置図

写真112　四阪工場ミゼット

写真113　四阪工場ミゼット（昭和30年代）　田中昌一氏提供

この島に残っていたミゼットの消防車は，ほとんど使われることなく，ほこりを被ったままの状態で，平成12年までこの島に置かれていた（写真112・113）．現在は，マイントピア別子に移され，展示されている．

貯水タンク

図30－12地点に，貯水タンクが残っている．貯水タンクは東側が真水用（写真114），西側が海水用（写真115）であった．小学校の東側に残る図30－13の貯水タンクは，コンクリートの円柱タンク200t が真水用，その下にあるレンガの長方形タンクが海水用であった（写真116）．現在も，防火用に水を貯めているが，真水のみにしている．海水を入れていると，パイプの傷みが早いためである．昔は，真水が貴重だったため，消火用にも海水を使用していた．[128]

昭和10年代に支給されていた水について，次のような記録がある．「家族５人に支給される１日の真水の量は，約１斗（約18リットル）．四阪へ転勤したばかりの従業員は，それまで水を平気で使っていた習慣が抜けず，顔をじゃぶじゃぶ洗って気がついたらご飯を炊く水がない，ということもあった．[129]」明治時代，大正時代に支給されていた水の量は，表17のとおり．大正時代に既に，家族５人に支給される水の量は，約５斗あったため，昭和10年代に支給された水の量は，もう少し増えていたのではないかと考えられる．また，職員と従業員との身分差，階級差は，水の分配にまで及んでいた．

「忘れもせん．30そこそこの単身赴任の学卒の職員が，風呂付きの社宅に雑役の人を使って水を運ばせ，じゃんじゃん流しよる．腹が立って大喧嘩．もっと節約せいと言ったら，水を使いたかったら出世せえと言われてね．口惜しかった．[130]」

昭和20年代前半まで，水の配給を受けるのは，子どもの役目だった．学校から帰ると木札を持って，タンクの水汲み場（給水所）まで行き，水の番をしている担当者にバルブを開けてもらい，水の配給を受けていた（写真117）．支給される量も管理されており，その水を家まで運んで水瓶に貯め，晩になると各家庭で使っていた．その水瓶では貯められる水の量が少ないということで，そのうちコンクリート製の水槽を配置するようになった．その後は，給水所の小屋は，段々に並ぶ長屋の各段に設置され，水の運搬が随分楽になり，さらに昭和27～28年頃には，各家庭にまで水が引かれるようになった．[131]

昭和30年代は，水の使用制限はあまりなかった．昭和40年代前半，美ノ端住宅では６時から18時まで給水があり，夜間は汲み置きの水を使用していたが，昭和46，47年頃から24時間給水になった[132]．

写真114　真水用貯水タンク

写真115　海水用貯水タンク

写真116　頂上貯水タンク（真水・海水）

表17　１日１人当たりの配給水量　田中昌一氏所蔵資料より作成

		大　人	子　供
明治38年	夏	１斗	５升
	夏 以 外	８升	４升
大正６年	夏	１斗４升	７升
	春 ・ 秋	１斗２升	６升
	冬	１斗	５升

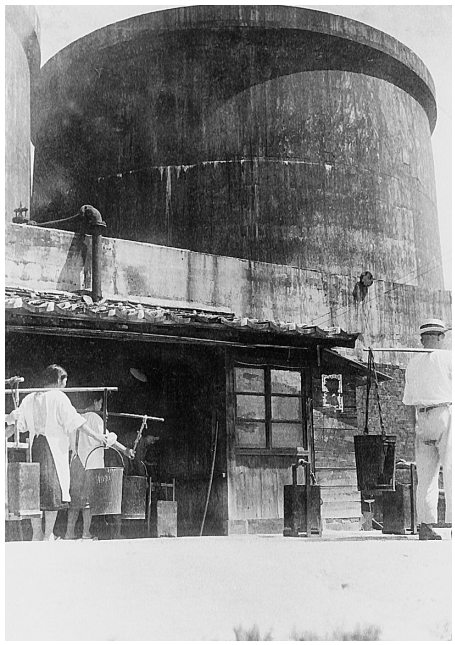

写真117　給水を待つ人々（昭和25年頃）　別子銅山記念館提供

寺

図30－14地点に，寺が残っている（写真118）．この寺は，明治44年７月26日に完成し，同年10月に第一回殉職者追弔会が行われている．それ以前の葬祭場がない時代は，元僧侶であった鎔鉱夫が，四阪島での葬儀を営んでいた．明治時代から毎年伝統的に行われていた殉職者追弔法会は，80名いた参拝者が昭和48年に16名まで減少したため，昭和49年より瑞応寺に統合して行うことになった．初代住職は，曹洞宗本山への鉱山布教師派遣依頼により，栃木県足尾から来た谷口大恵師である．４代目住職は，大正７年から務めた浅野鉄元師．その後，４代目の子息である浅野英司師が，昭和25年から跡を継いだ．[133]

昭和初期に工場で働いていた従業員は，殉職者について次のように語っている[134]．

「昭和37年の慰霊法要で読み上げられた殉職者は，130人．明治時代の不明数を合わせると，もっと多いはず．

写真118　寺

腕や足，指などの切損は，相当あったと思う．鉄製バケットが上から落ちて４人死んだり，高圧線に触れて即死したりの事故を知っていたから，人一倍慎重に働いた．」

無縁仏供養については，昭和61年まで鼠島で行われていたが，昭和62年９月，鼠島の供養塔をこの美濃島の寺に移した（写真119）．その後，年１回の無縁仏供養は，ここで行われるようになり，それは現在も毎年続けられている．[135]

写真119　無縁仏供養塔

商店街

図30－15地点に，約100mにわたり商店街跡が残っている（写真120）．道の北側には，建物は無くなっているが，ここには配給所や食事処が，そして道の南側には，雑貨屋，パーマ屋，肉屋等があった（写真121・122）[136]．図33によると，配給所では，白米，雑穀，砂糖，味醂，氷，呉服，足袋，肌着，煙草，文房具，化粧品，金物，陶器などが揃っていたようである（写真123）．配給所で揃わないものは，商店が補っており，三宅商店，前田食堂，高橋理髪店他，十数軒の商店が並び，ここを「銀座通り」と呼ぶ人もいた[137]．四阪島の日用品販売所は，明治38年10月の美の浦埋立地での開設が記録として最も古い[138]．また，中央倶楽部の東側には，宮窪町役場の出先機関があった．出産の時などは，わざわざ宮窪町役場まで出かけず，ここに届出書を出すだけで手続きを終えることができた[139]．この宮窪町役場の仕事を全て代行していた機関の正式名は，「部落人事詰所」といった[140]．

この通りには，中央倶楽部の建物が残っている．この倶楽部は，昭和12年12月に落成した[141]（写真124）．四阪島の倶楽部は，この中央倶楽部の他に，美ノ上倶楽部・頂上倶楽部があり，交通不便な地に住む従業員とその家族のための，レクリエーション施設として利用されていた[142]．美ノ上倶楽部は職員用，中央倶楽部は一般社員用として使われていた．監理指導するものとされるものが，なぁなぁになって仕事に支障が出ないように分けられていた，といわれている[143]．中央倶楽部の下階には共同浴場があり，従業員はここで海水を沸かした潮風呂に入っていた[144]．このような共同浴場は，他に美の浦と頂上にも存在したが，戦前は北浦にも浴場があった[145]．頂上の共同浴場は，頂上社宅とタンクの間にあったが，現在は残っていない．この中央倶楽部の浴場は，東側が女湯（写真125），西側が男湯で，16時から21時まで開いて

写真120　商店街跡（西から望む）

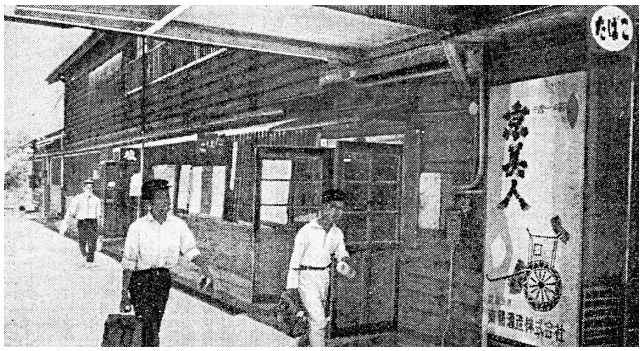

写真121　商店街を通る中学生（昭和39年）
S57. 8 .27朝日新聞掲載記事より転載（安藤喜多夫氏撮影）

写真122　商店街（昭和末期）　伏見愛夫氏提供（故山路住穂氏撮影）

おり，入浴は無料だった[146]．新居浜より水船で運ばれてくる真水はとても貴重だったので，あがり湯の時にだけ使っていた[147]（写真126）．その後，水輸送の増大と塩化ビニール管の普及で，昭和35年頃から潮風呂に入ることもなくなった[148]．

写真123　配給所内の様子　別子銅山記念館提供

写真124　中央倶楽部（昭和25年頃）　別子銅山記念館提供

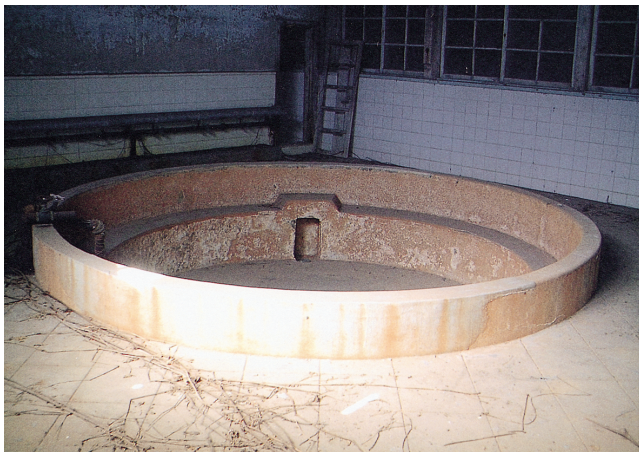

写真125　中央倶楽部浴場女湯

写真126　洗い水をもらうため潮風呂前で待つ住民（昭和33年）
S57.8.19朝日新聞掲載記事より転載（安藤喜多夫氏撮影）

索道鉄柱

図30－16地点に，索道鉄柱が残っている（写真127）．この索道が完成したのは，大正10年３月である（図34・写真128）．ちょうどここから見下ろしたところ，図30－17地点に配給用の船着場と起重機があり，そこから学用品や食料品，雑貨などを索道でこの地点まで上げ，商店街に運んでいた[149]．この辺りは，美の上，美の浦からも

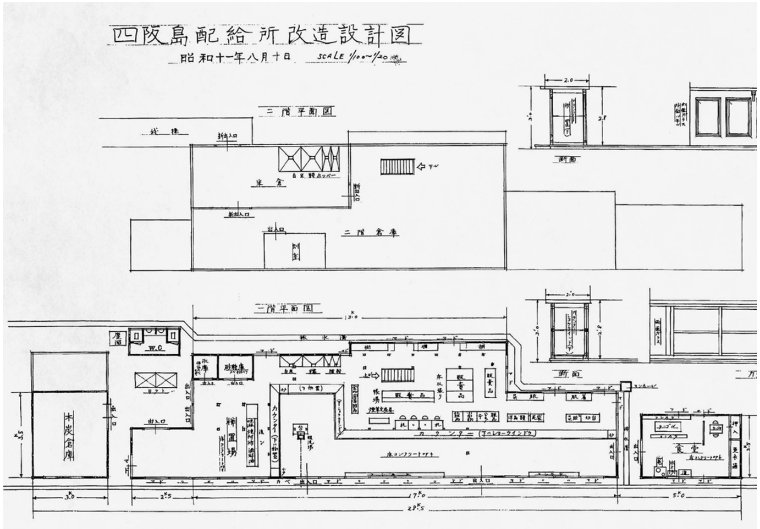

図33　配給所改造設計図（昭和11年）　別子銅山記念館資料提供

写真127　索道鉄柱

近いので，ここで市場が開かれることもあった．商店街に生協ができてから北浦市場がなくなったため，明神島から運ぶ野菜も，商店街西端つきあたりの木の下で販売されるようになる[150]（写真129）．生鮮食料品は，午前中に買わないと売り切れてしまうことが多かった[151]．この索道は，昭和40年代前半頃から使用されなくなった[152]．

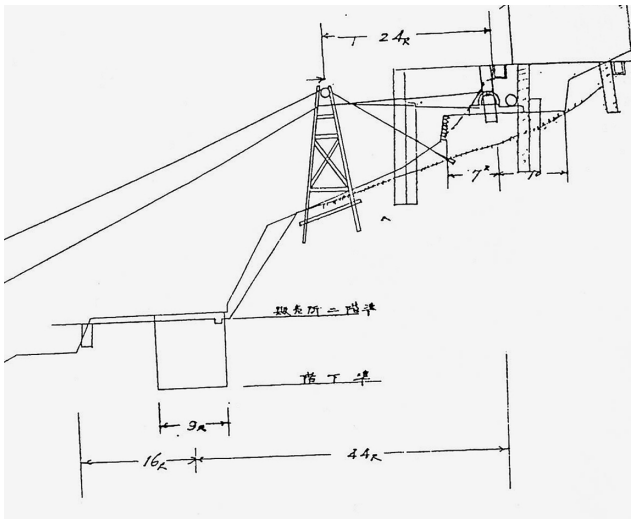

図34　索道図面　別子銅山記念館資料提供

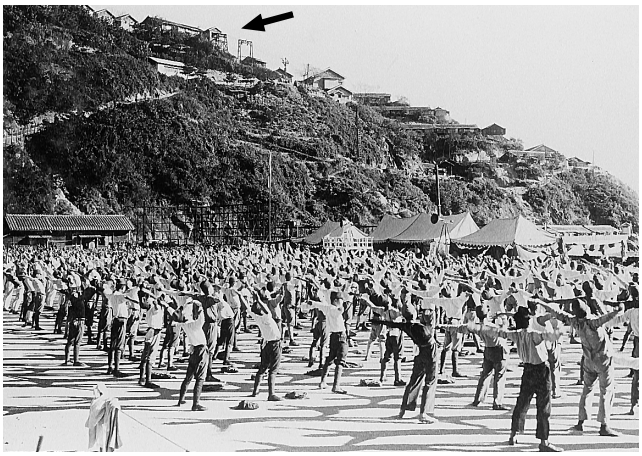

写真128　山頂に見える索道引揚げ場　別子銅山記念館提供

写真129　索道引揚げ場下の市場のようす　松山明子氏提供（故日和佐初太郎氏撮影）

トンネル

図30－18地点に，トンネル南入口が残っている（写真130）．ここは，戦時中，防空壕として使っていたところを約100m掘り進み，島の北側まで貫通させ，トンネルとして使用していた[153]（写真131・132）．北側の出入口は，旅館前の階段を上ったところ[154]，現在の一島一家会の記念碑の上にある[155]．また，防空壕については，ここだけでなく美ノ浦グランドの東側等，10カ所に存在した（図35）．週１回の保安係によるトンネル内の点検と，年１回の坑夫による点検は，住民がいる間ずっと続けられた[156]．トンネルが貫通するまでは，ほとんどの人が東側ルート（商店街～北浦）を通って，美濃島の北側と南側を行き来し，途中養豚場があった西側ルート（美ノ端～勝浦～銅ヶ関）を通る人はあまりいなかった[157]．西側ルートを通るのは，学校の授業でマラソンをする時くらいであった[158]．

写真130　トンネル

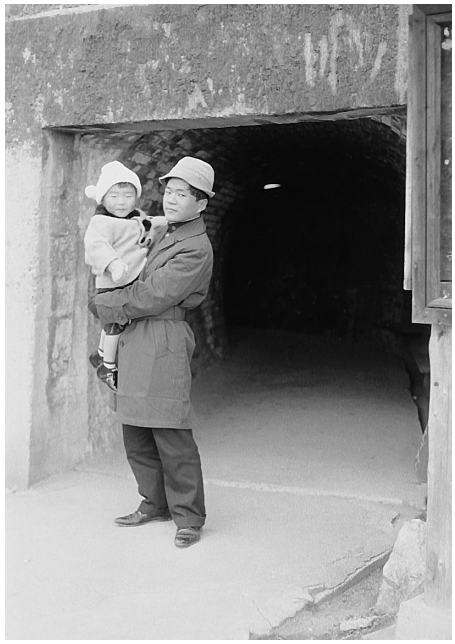

写真131　トンネル南側出入口（昭和40年代）　宮本直俊氏提供

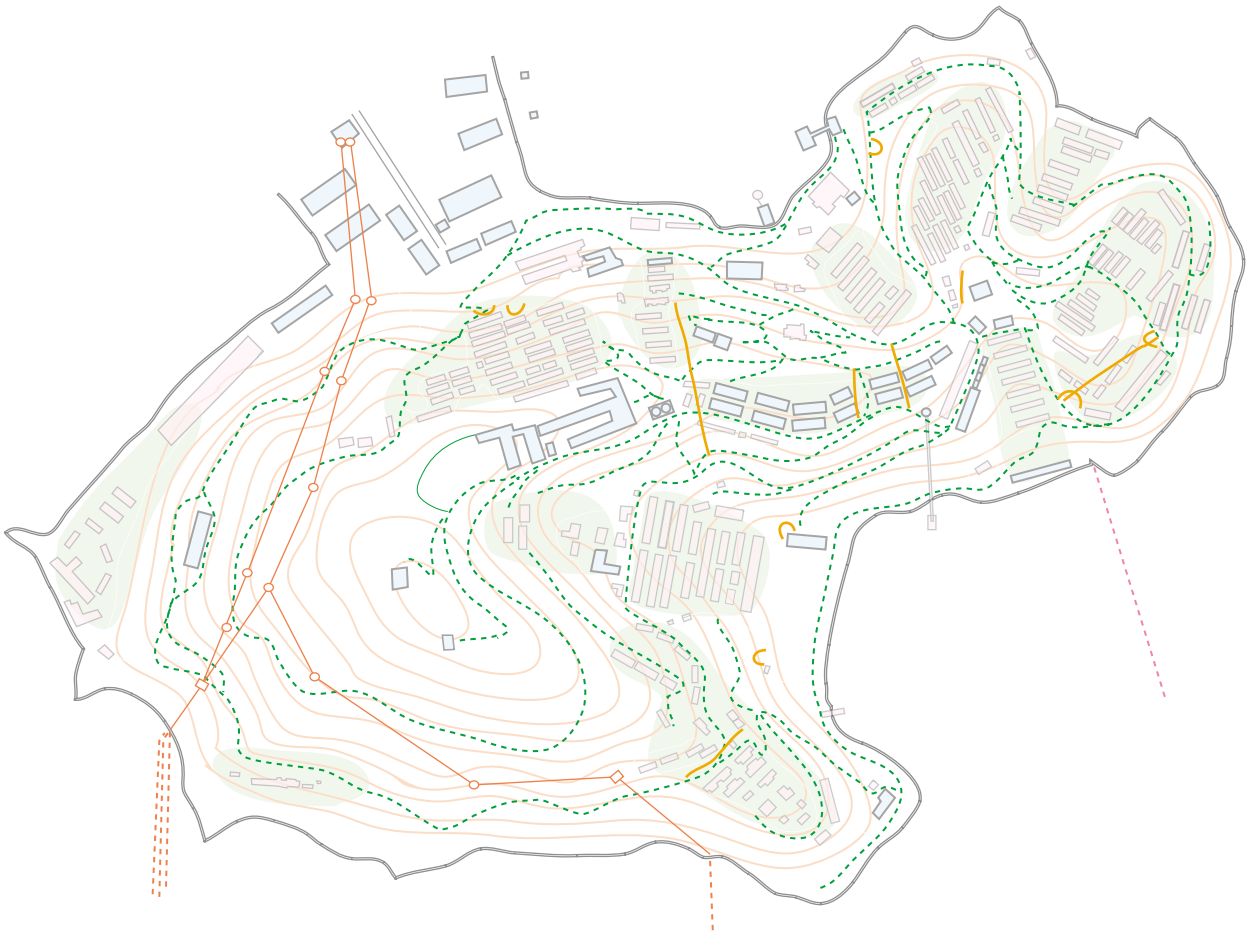

図35　防空壕位置図（オレンジ線）　田中昌一氏からの聞き取り調査により作成

写真132　トンネル内（昭和40年代）　宮本直俊氏提供

社宅

図30－19一帯に，社宅が残っている（写真133）．これら頂上の社宅群は，それまでの長屋の社宅群（写真134）を壊して建設されたもので，下段及び中段社宅が昭和44年に，上段社宅が昭和46年に建設された[159]．また，図30－20の美の浦グランド及び図30－21の巽浦（写真135）に残る社宅団地は，それぞれ昭和36年，41年に建設されたものである[160]．その他の木造社宅は，昭和56年５月から始まった解体で，ほとんど撤去されている（写真136・137）[161]．島で最初の住宅焼却は，昭和59年９月４日の明見谷で，この時は最初の住宅焼却と言うこともあり，全国ニュースで放映された[162]．

四阪島銅製錬が終結する昭和52年以降，完全通勤体制となり，島の社宅で暮らす人々はいなくなった．その当時，唯一宿舎として２階建頂上アパートを利用していたのが，保全係の人，警備員，食堂のまかないさんくらいである．現在，この社宅を利用するものは皆無で，海が時化たりして船が出ないときは，事務所近くの仮宿舎に寝泊まりしている[163]．

四阪島に建設された社宅のほとんどは，明治時代に建てられ，その後一部増改築が行われている．美ノ上，美ノ端，美ノ浦（写真138），日暮，西日暮，頂上，巽浦，糯ケ岡，吉備峠，吉備浦，東巽，明見谷，北浦．総戸数968戸あった[164]．昭和中期の写真139を見ると，美濃島の特に東側で社宅がひしめきあっているのが分かる．それぞれの建築年は，表18のとおり．社宅は格付けされており，職員用，準職員用，従業員用と分けられていた．職員は，部屋がいくつもある一戸建や二戸建であったが（図36），従業員は，共同トイレ，共同風呂，一家に１～２部屋の長屋社宅であった[165]（図37）．職員は上のほうになると，その家に水を汲んで運ぶための人が雇われているくらいだったが[166]，従業員の社宅の中には，畳や天井のない社宅もみられた[167]．四阪島で生まれ育った

人々は，当時の社宅暮らしを次のように語る．
「今の住宅事情と比較すると，一家に二間と狭いが，当時はあまり不便は感じませんでした．島の人が，皆家族のようなものだったから，家にカギをかけることはほとんど無く，何かあれば近所の人達と助け合う，とても温かい暮らしでした．[168]」
「家と家の間は１ｍかそこらだったから，両側の窓を開けると隣のさらに向こうの家と話ができました．どの家の誰が怪我したとか，家にいないとか，今日は夕飯に何を作っているなどということが全部分かる．安心して暮らしていました．[169]」
社員寮としては，中和寮（写真140），東寮，養成寮，有信寮，尚志寮があった[170]．寮も，社宅同様格付けされており，美ノ端の先にある図30－22の中和寮は，大卒のみが入れる寮であった[171]．現在は，昭和14年４月完成[172]の中和寮のみ確認できた（写真141）．昭和14年は，中和工場が完成した年なので，この名前が付いたと思われる．東寮は，女性教師のための寮で，写真142の養成寮は，当初４年間ここで養成を受ける単身者のための寮であった[173]．写真143の有信寮は，実は２代目である．同じ場所に建てられていた１代目の寮「有隣寮」が，昭和18年12月２日に火災で焼失した．そのため火災後，同じ寮が再建されたが「隣」という字が「燐」に似て火の気がして縁起が悪いというので「有信寮」に改名されたのである[174]．
では，この島で暮らしていた人は，どのくらいいたのだろうか．四阪島の人口は，製錬開始直後の明治38年１月には，900世帯あり計3,549人であった[175]．大正末期の四阪製錬所大改革の直前には人口のピークを迎え，5,500人を突破している（図38）．その直後の大正10年に3,000人台まで激減して以降，約40年間は大きな変化はなく，3,000人台を保っていた．そして昭和40年代，新製錬所（東予工場）建設等の準備が着々と進むにつれ人口が激減し，昭和51年12月，ついに銅製錬所の火が消える．昭和52年４月からは完全通勤体制となり，島の住民は病院の勤務者等ごく限られた人のみとなったが，その人々も10年後に島を去っていった．以後，現在に至るまで四阪島に住民はいない．
四阪島労働者数で大きな変化があったのは，大正時代である．その時代における従業員数の推移及びその内訳は，図39のとおり．大正10年に従業員数がガクンと減っているが，これは，前述のとおり四阪島再建のため行われた製錬所大改革のための解雇による．その当時の様子は，次のとおり[176]．
「大正10年３月，駐在所の切抜（図30－11）の板塀10ｍに，氏名を墨で書いた半紙がズラーッと貼り出され，氏名が出ている人はこれを見て顔色を変えて家へ帰って行った．この時の解雇人数は，660名余り．氏名が貼り出された人々は，はんこを持って人事詰所へ行き，荷作りのわら縄，こもを貰って自分らで荷作りをした．次から次へと四阪を出る人，見送る人で回漕店は大混雑であった．」
大正９年と大正11年を比較すると，労働者は三分の一にまで激減している．
では，この当時の賃金はどうであったか．大正時代の四阪島における賃金の推移を，図40にまとめた．大正元年に約60銭だった四阪島労働者の平均賃金は，徐々にのびて大正14年には約２円になった．大正９年に50銭も増加したのは，前年に就業時間が変更された際，臨時手当が本給に組み入れられ，56～65％の賃金増加が図られたためである[177]．では，四阪島の労働者に支払われていた賃金の水準はどうであったか．表19のとおり，他産業と比較した．大正７年の四阪島労働者の平均賃金は86銭と低く，多くの労働者を安い賃金で雇う鉱山特有の時代背景がみえる．この時代，女性の賃金は男性に比べ低いが，四阪島ではそれが顕著に表れている．女性の賃金は，男性の２分の１をほとんど切っており，３分の１近くまで落ち込む職種もある．また，精銅夫（女）や機械夫（女）に支払われた賃金の記録はあるが，労働者数としては数えられてないため，実際に四阪島で働いていた労働者の数は，図39よりも若干多いと考えられる．

写真133　２階建頂上アパート群　伏見愛夫氏提供（故山路住穂氏撮影）

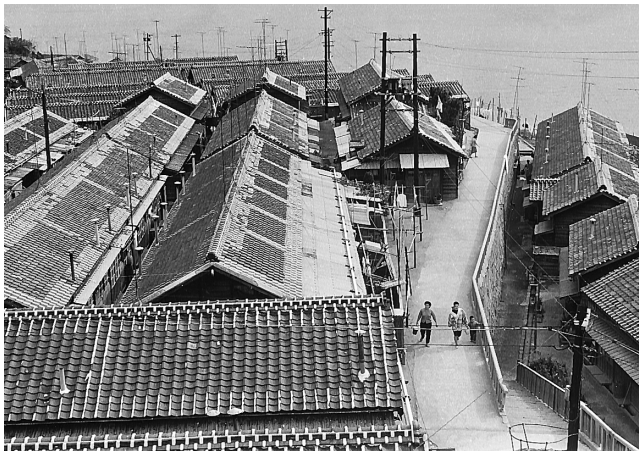
写真134　長屋社宅群（昭和38年頃）　大田恵茂氏提供

写真135　社宅団地

写真137　西日暮社宅焼却後

写真136　西日暮社宅焼却前（昭和末期）伏見愛夫氏提供（故山路住穂氏撮影）

写真138　美の浦社宅（昭和41年）宮本直俊氏提供

写真139　四阪島全景（昭和中期）別子銅山記念館提供